

原発の完全撤退と継続に関する、伊・独・日の政策比較

——伊・独・日の気質と第二次世界大戦の終戦処理から、原発政策を比較する——

中國瀋陽師範学院 宮内紀靖

【1. 目的】

イタリア・ドイツ・日本の原発政策とその決断を比較する為に、それぞれの気質と第二次世界大戦の終戦処理の方法・仕方を比較検討する。政策決断をどの様にしたのかを解明し、それにより原発政策の実態を明確にする。

【2. 方法】

三カ国の原発政策は、完全撤退・時期を特定して撤退・『脱原発』と称しずると継続するの、三つに分かれる。伊は、国民の50.2%の『廃原発』の意志(化石燃料と自然エネルギーに限定するという国民投票)を受けて、日本の福島原発事故後に、完全撤退を決定した。独は2030年までに原発を廃止するという決断(チェルノブイリ事故後にも同様の決断をしたが、再開してしまった)をして、自然エネルギー採用に全力で立ち向かっている。これに対して、日はずると原発を再開してベースロード電源とする政策を取り、原発の継続を何等の根拠もなく、嘘と無言を貫いて継続を決めている。この比較は、気質という定性比較と、敗戦という事実の決断という、事例比較の方法により、原発政策を明確にできるので、この方法を採用することにする。

【3. 結果】

伊の気質は、陽気で享乐的で、規則や固定的なシステムを信用せず、『知り合い主義(クリエンティズモ)』で問題解決を図る。国家や軍隊などの大組織になるとやる気のない人が多いのに対し、小規模の組織(サッカー)や特定の目的遂行(パルティザン)となると、世界でもトップクラスのパフォーマンスを見せる。自らの命を懸けて行動する。独の気質は、衣や食よりも住を重視。絵画より音楽を好む。真面目で秩序好き、善と悪、要と不要、自と他、公と私、等ははっきりと分別されなければならない。単独行動を嫌い、クラブ活動を好む。物事を組織化することを好む。領邦(ラント)に忠誠を誓い、軍隊組織を尊び(プロイセン)、組織の一員として行動することを容認している。これに対し日の気質は、建前の公と本音の私が混在し、組織にも『本音と建前』が蔓延り、派閥が意思を決定する。軍隊の指揮官と参謀の関係も独特で、君臨する司令官と指揮までしてしまう司令官型の参謀が、階級・階層差(海軍のハンモック番号・陸軍の席次順)さえ無視する特異なものであった(第二次世界大戦の辻正信に典型的に見られる)。

【4. 結論】

気質の差異と、ムソリーニ逮捕事件・ヒトラー暗殺計画・二二六事件に象徴される、伊・独・日の軍事組織とPartigiano(徒党・仲間・加担者)の行動とその結果は、原発政策の結果と合致する。一気に廃止・期限を切ったの廃止・『脱原発』の名目での継続は、気質や軍事組織内の行動とパラレルなものだとの結論を得る事が出来た。